

# ジハードと死

オリヴィエ・ロア

190781151 劔日向

# 初めに

- 日本はイスラーム過激派のテロ攻撃を
- 理由としては日本のイスラーム教徒は少数
- そして彼らの中でテロ攻撃の画策は皆無
- ではなぜ他国のイスラーム教徒達は過激化？

# 第1章

・テロリズム性を保

→新

テ

・新しい死の

→「若

・語源的には「神に向かって努力す

る」

・暴力的な行為が「ジハード」のなの

下で生起

→暴力的な運動のことを示唆

・虚無主義

・今生きている世界に意義、目的、本質的な価値がないと主張する考え方

ニヒリズム志向が中心

が断固た

希求

現代

」

# 1節 テロリズムとジハーディズムの新しい形態

- 自爆行為が普遍的になったのは1995年

→さまざまな類のテロリズムやジハーディズムが個別化していく過程の一環で生起

- 1980年代の非宗教団体のテロ行為により基盤が形成

→象徴的に「そこ」にジハードの新しい定義を軸に拡大「家を不安定にし、抑圧を促す」目的

- 自爆攻撃も非宗教団体が元

# 2節 ジハーディズムがジハードにとって代わる時

## 1. 元のジハード

新しいジハ

- イスラ

→ 恒常的、

- 集団的な



- ジハードの志願者は明確な条件が必要

後

### 3節 放逐と自殺によるテロリズム

- 現代のテロリズムの概念形成がなされたのは1990年代
- ムスリム世界の問題は自分たちの指導者の不信心
- 為政者がイスラームの慣習を守っていても政治の進め方は不信仰者
- 不信仰者の指導者を殺すことで人々に蜂起を促進
- テロ攻撃の効果的な在り方、実行者の死が規範
- →より良い社会を作るより、自分個人の救済

## 第二世代

- ハレド・ケルカル（GIAメンバー）
- クアシ兄弟（シャルリー・エブド襲撃事件）
- アブデルハミド・アバウド（パリ同時多発テロ）

## 特徴

- 欧米生まれや、欧米化した人が多数
- 親の出身国とは繋がりを断絶
- 改宗者が多数
- 中にはテロ組織と無関係な人も存在

## 第2章 過激派とは誰か？

- 過激派とは誰かを研究するための資料は膨大

- 活動しているテロリストは警察などによりリスト化、ジャーナリストにより公表

またテロリスト自身、さまざまなSNSで発信

- 本著はフランスのテロリストに特化したデータベースを作成

- これによるとジハーディストとテロリストの履歴は極めて類似しており同じ範疇に存在



# 1節 テロリストのプロフィール

• 典型的なタイプは存在しないが頻繁に共通する特徴は存在

- ハレド・ケルカル（フランス育ちの最初のテロリスト）
- クアンシ兄弟（シャルリー・エブド事件）

## 共通する特徴

- 社会に溶け込んでいた幼少期
- 軽犯罪を繰り返していた時期
- 刑務所での過激化
- テロ攻撃と死

→ 家か少なくとも一人は存在

## 2節 仲間、兄弟、女性

- ・過激派グループの形成過程はほとんど同一

→多くの志願者がジハード現地に赴きグループと  
中枢部（アルカイーダやダーイシュ）と連携

グループの構造として最も多いのは兄弟

- ・兄弟は過激派が持つ「世代」という  
面で重要性を示唆

→「若者文化」を共有  
「師子」が誕生

→自分の子供を組織に提供

### 3節 若者文化、非行、犯行

- 過激派の大部分は「若者文化」に精通

→ 彼らは他の若者と同じように、行動

- その大多数が少年時代に軽犯罪を犯した経験

→ 刑務所で宗教の枠組み外で、過激化した「同輩」と遭遇

→ 世代意識の強化、制度に対する反逆、団結した集団の形成、規範順守に依拠した自負心の追及  
犯罪を正当な政治的反逆とみなすことに結合

## 過激派の特徴的なプロフィール

- 第二世代または改宗者
- 軽犯罪歴
- 宗教教育に無知

→ 仲間や集団、インターネットを通じて最近になり急に改宗

- 彼らは信仰の道に入ったことを公開
- 断罪の宣言は強烈(不信仰者は敵)

→ 「過激性のイスラーム化」

## 5節 「客観的」な原因の不在

- 前述した共通の特徴を除けば彼らの動機を理解する手助けになるような、社会的、心理的指標と相関関係にあるようなものはほとんどない。
- 動機が分からないのは、筆者達がテロリストの軌跡がステレオタイプとは程遠いことを無視しているからである。

→テロリストに特有な精神病質の特徴はない

- ひとつ明らかなのは、精神疾患を病む人が自分の妄想を意味のある世界と一体化させる手段としてジハーディストを見出している。（ジハーディストの空想世界）

→狂気の虐殺の瞬間正気になれる。

→「精神病質者」ではなく「テロリスト」の名を得る

### 3章 ジハーディストの空想世界 過激性のイスラーム化

- ジハーディズムはサラフィー主義の延長上にある。

→ 宗教的

サラフィー主義

• 過激派

- 初期イスラムの時代への回帰を主張する。

とは確か

→ ジハー

力的行為

- 復古主義的な改革運動

と後に暴  
を持ち合

わせてた

- 彼らが過激なのは、そうなることを選択しそれだけを魅力に感じるからである。

## 2節 苦しむムスリム社会のために復讐する英雄

- テロリスト達の動機は少しの差はあれど共通

→ 第一の動機：「イスラーム人民」に対してなされた欧米諸国の残虐行為。

第二の動機：戦士として任じられた復讐をはたす英雄の役割

第三の動機：死で有り、そして天国の到達

- ウンマ（イスラーム共同体）の敵討ち

- どのウンマの仇を取りたいのかは特定されたことは皆無

- 個人位置
- 英雄になると運命づけられていなかった者が英雄に
- 関係
- 空虚で平凡な生活をおくっていた人物が天からの声をきき超人的な存在に変身（CODが元）
- 物
- 英雄はウンマを救済し、すべてにわたる権利を所得
- 

2. グローバルでヴァーチャルな共同体を具現化したカリフ制国家への依拠



### 3節 過激派の宗教 若者の暴力 世代性ニヒリズム

・新しい社会  
→ 憎し  
ことに  
→ 過  
・代表  
→ 一連

・新しい社会  
→ 憎し  
ことに  
→ 過  
・代表  
→ 一連

既存の  
希求する  
心  
ティック

なうえに自殺願望まである、社会と断絶した若者たちがおこなった大量殺人における共通性には、衝撃を  
禁じ得ない。

- 若者たちがテロ行為に走るのは、出自への屈辱感に起因する個人的な反抗
- イスラームの黄金時代への回帰という壮大なストーリーと信者たちのヴァーチャルな「共同体」と合体した結果。
- 若者を英雄にそして恐怖の支配者に変身させる現代的な暴力の美学にもとづいて脚色されたストーリー。

→このような物語の構築はテロ組織（アルカーイダやダーイシュ）によって演出されている。

- これらには独自の戦略がある。

## 4章 ビンラーディンの陰からダーイシュの太陽へ

- アルカーイダといえは、9.11やたびたび起こすテロで恐れられている。

→近年のシリア支部であるアル＝ヌスラ戦線はほとんど穏健に等しい。

- ダーイシュの方は9.11に匹敵するほどの事件は起こしていない。

→ダーイシュが畏れられているのは、大量殺人の能力ではなく、恐怖を演出する驚異的な才腕

- しかしダーイシュは構造的に脆弱

→世界征服の壮大な戦略があると思われているが、扇動や偶然、付け焼刃な部分があり妄想に等しい。

# 1節 テロリストの第三世代と新たなグローバル・ジハードという神話

- テロリストの「第三世代」と新たなグローバル・ジハードというのは存在しない。

→アルカーイダの構成員の一人であるアル・スーリが組織の指導者にムスリムの過激化こそ重要だと説いた結果、新しいジハーディストの世代が生まれた

→別にいままでやっていたことと同じ

- ダーイシュもアルカーイダのテロを踏襲しているため、テロの方式は変化はない

## 2節 中東とジハードの舞台におけるダーイシュの出現

- ダーイシュの重要人物はアブー・ムスアブ・ザルカーウィーである。

→アルカーイダと連携していてイラクに支部組織を創設した。

→ピカリフ制国家は批判

- アルカーイダは、ア
- イスラム過激派にとっての目標
- 中世のイスラム王朝から1914年まで続いた伝統的政治制度

→アルカーイダは時期尚早に崩壊した。

- ダーイシュが2つの仕方で世界規模のジハードに踏み込む。

→ 第一に国際的なジハード部隊を結成して、シリアの最前線で戦い、規模は劣るがイラクでも戦う。

第二にカリフ制国家を宣言して、アルカーイダのローカルな組織を世界規模のジハードの中心および司令部に変身させる。

- ダーイシュが発揮した才腕はごく限られた範囲の地域的要求とグローバル・ジハードを関連付けたことにある。

→ この宣言はムスリムであれ改宗者であれ、欧米化した若者に多大な影響を与えた。

・若者たちは中東情勢の複雑さに関心はない

→ダーイシュにも同化しずきられる。

・ダーイシュに込める

→ダーイシュ

・ダーイシュはとって理想的



の社会  
して生

を取り

なった。

人に

## 結論 アル=ゴドーを待ちながら

- 著者は結論を大まかに4つ述べている
- ダーイシュがさらしている脆さは私たち自身に帰せられる脆さだ
- テロ攻撃はイスラームの「フォーマット化」を促進する
- 現代化は宗教的問題で有る前に社会的問題だ
- 「脱過激化」という語を呪文のように繰り返すのはやめるべきだ



## 終わりに

- 著者は最後にこう述べている
- 過激派たちははっきりと活動家とみなさなければならぬ。
- 活動家は後悔することもあるがまずは自分がしたこと、もしくはただ単に意図したこと自分で受け止めなければならぬ。
- そして過激派に話をさせなければならぬ。